

編集者のことば

本誌も、本号をもって満年を送ることになる。

5年といえば一区切りの期間と言ってよい。その間に本誌がどれだけ進歩発展したかが問われるだろう。その答えは、編集者自身よりも読者に出してもらう方が公明であるから、そのことをむしろ読者にお願ひしておくことにしよう。最初期と最近とその中間期のそれぞれ2号分くらいをならべてみると、その答えが何らかえられそうに思われるが、どうであろうか。

本誌の5年は、むしろ本学都市研究センターの5年である。本誌の進歩発展如何は、センターのそれにほかならない。これもまた、評価は読者にさせていただくべきであるが、内部からする一つの見方をここに記しておきたい。それが本号の編集内容にかかわるからである。

過去5年間、センターの研究は、実体論に関するもの2チームと方法論に関するもの1チームによって行なわれてきた。どのチームも、5年間を整理・回顧した結果、大学の中期7年計画をも参照して、多かれ少なかれ再編成をすることとなった。実体論中の「震災予防に関する総合的研究」と方法論とは、基本形態をほぼそのまま維持するが方向を新しくすることとなった。

他の実体論「大都市居住問題の総合的研究」には、注目すべき改編がおこなわれる。そのサブテーマ中の一つ「居住環境上の諸問題」は、多くの問題点を明らかにし、なかんずく土地問題の一般性を示唆して、一応終了することとなった。それに対応するように、他の2サブテーマは、土地の上で展開される都市市民の居住生活に焦点をおくことが適当と、考えられるにいたった。その新しい方向は、センター第6年目以降の活動として、順次本誌に報告されるはずである。

本誌の特集として掲載された論文は、上の居住環境上の諸問題に関係する研究として報告されたものがある。他の2論文も、形は特集外として扱ったが、実質においては特集テーマにかかわっていると言うべきであろう。したがって、本号は過去5年を評価する一つの資料になるであろう。ただし、このサブテーマの研究の成果報告がこれで終わるのではない。言うまでもなく、研究作業がすんで、しかもしばらくの時間がたたなければ、作業の結果、まして学問的にこれを発酵させた成果が生まれるはずがないからである。したがって、本号の諸報告は、むしろ一つの間報告と言うべきものだろう。

時間は区切られても、研究そのものは区切りなく進行してゆくものである。